



地域包括ケア病棟のご紹介



～認知症のある患者さんへの日々のケア、看護の取り組みについて～

6階東病棟 看護師長 古谷 淳子

6階東病棟は平成29年5月に開設された地域包括ケア病棟です。在宅と医療の橋渡しとしての役割を担っており、一般病棟で急性期治療を終えた慢性期、回復期の患者さんが、退院後の生活を送る場所を患者さんやご家族と一緒に考え、退院の準備を支援しています。また、在宅療養している患者さんの看護・介護をしているご家族の休養や、緊急のことで家を空けなくてはならない時に“レスパイト入院”として当病棟を利用してもらうこともあります。

地域包括ケア病棟の特徴は、認知症を併発している患者さんの割合が多く、病棟設置基準である3割を大幅に超え、ここ一年では5割から7割を超えることもあります。

認知症の症状がある患者さんは、入院環境に馴染めなかつたり物忘れをしやすかつたりする傾向があります。例えば入院している目的を忘れて「家に帰りたい」と夜中に荷物をまとめて病棟から離れようとしたり、点滴の針が腕にあることや、栄養剤を胃に入れるために鼻からチューブが入っていることを忘れ、ご自身で点滴の針や鼻のチューブを抜いてしまう事故が発生することも少なくありません。

そのような認知症の症状がある患者さんに対し、現在地域包括ケア病棟では、2つの取り組みを行っています。今回は、週に一度の「音楽療法とイベント」と「介護・医療用マフの使用」をご紹介します。

「音楽療法」は、当院精神科外来を通じて外部より音楽療法士を病棟に招き、密にならない程度の数人の患者さんを対象に、昭和の歌謡曲や童謡と一緒に歌ったり、歌詞を読んだり、キーボードに合わせトーンチャイム(手で持つ鉄琴のような楽器)を実際に患者さんに奏でてもらいながら、手足を使って振り付けるなど、視覚・触覚・知覚・聴覚を刺激する機会を設けています。音楽療法を受けている間は抑制具(手にはめるミトンやクリップセンサー等)を外すことが出来るため、開放的な時を過ごしてリフレッシュしたり、適度な疲労を促し、夕方に現れやすい“黄昏症候群”の予防にも繋がる等、患者さんにとってのメリットは多くあります。また、「イベント」も七夕の時期には笹の葉に短冊や飾りを作って飾り、魚(紙で作ったもの)釣りゲームや塗り絵、輪投げなど、参加する患者さんの状況に合わせて内容を決めて行っています。





2つめの「介護・医療用マフ」について紹介します。

これは、認知症マフとも言われており、イギリスが発祥と言われています(マフ:筒状の防寒具で左右から手を入れて温めるもの)。認知症の患者さんがこれに触ることで気持ちが落ち着くと、イギリスの介護施設や、救急車にも利用されているそうです。

日本でも徐々に知名度が上がってきているところで、所々でマフの活用が広がっており、介護用マフの作り方教室を開いている役所もあります。当病棟でも昨年10月頃より病棟職員が手編みで作成し、対象とする患者さんに使用してもらうことを試みています。マフに触ることで心地よさを感じたり、色を見て楽しくなったり、温かくなってリラックスしたりすることで、身体に付いているチューブを気にせず、抑制具であるミトンをはめない時間を作っています。

使用の際には事故が起こらないよう適宜観察を行いながら関わっています。安全面(異食行為のある方には使わない)、感染面(一人に使用した後は必ず洗濯して次の方に使用する)にも注意しています。

始めたばかりなので効果を数字として表すことは出来ていませんが、根拠を持っているケアの1つとして継続し、今後も実践していきたいと考えています。

